

Eureka VI

六年制通信 No. 6 平成30年5月25日(金)号

大和から思い出したことなど

先日の研修旅行で大和ミュージアムを訪れました。完成まもなくの頃に一度行っているのですが、今回は生徒たちのおかげで面白い経験をしました。最初にミュージアムの4階で、係の人が簡単なレクチャーをしてくれるのですが、そこで上空から撮影した三重中高の写真を見せられたのです。ここ、どこかわかりますか、と。何人かの生徒がすぐ、あ、三重中高だと答えていました。偉い。それで、では実際に大和がどれくらい大きさかというのと、言いながら、そこに大和を重ね合わせてくれたのです。大和が全長263mで世界最大の戦艦だというのは知識としてはあっても、実感としての大きさはわかりにくいものです。三重高通りに横たわった大和は、東門から西門まででは足りないほどで、なるほど三千人もの乗組員が搭乗するだけのことはあると思いましたね。

さて、大和と言えば、吉田満の『戦艦大和の最期』が有名で、私も若い頃に何度か読んでいます。初めて北洋社の単行本で読んだとき、気がついたら正座していたのをよく覚えています。今回は角川文庫で読みなおしてみました。文庫版には『一兵士の責任』も収録されていて、その冷静で論理的な文章に圧倒されました。また、小林秀雄や三島由紀夫の書評も載っていて、勉強になりました。読みながら、私はいくつか、もうすっかり忘れていたことを思い出してもいました。一つは、平賀讓中将のこと。この人は大和の設計に携わった人で、のちに東京帝国大学の総長になられ、現役のまま亡くなられたので、帝大初の大学葬が行われた、そういう人です。学徒出陣のため、東大の卒業が半年早められた、その卒業式に、時の総理大臣である東条英機がぜひ列席したいというのを、来てもらわなくていいと撥ねつけた総長です。「ニクロム線」というあだ名だったらしく、すぐかっとなって怒鳴るのだそうで、名前は讓だがあれは不讓だと言われていたらしい。恐そうだから遠くからそっと見てみたい人物ですね。この平賀総長の「理想は高きに持し、実践は低きにはじめよ」から始まる訓示が残っていて、いずれまた君たちにも紹介するかもしれませんが、私はそれを思い出したのです。とても戦争に向かう若者への言葉とは思えない、教育者の矜持あふれる訓示だったとだけ言っておきますね。

もう一つは、『嘘の効用』(上)(下) (富山房百科文庫) というエッセイ集です。この著者である末弘^{いづたろう}厳太郎は、『戦艦大和…』の吉田満の恩師でもあるのですが、出陣を前にした吉田ら法科の学生らに「かならず元気で帰ってきて、再び平和がよみがえったあと

の学問の世界を、諸君の若い力でより豊かなものにしてくれることを約束してほしい」と、これまた平賀総長のような、とても時局向きとは思われぬ素晴らしい^{はなむけ}「銭」の言葉を残しています。このエピソードは角川文庫の『戦艦大和』に出ています。

末弘博士の『嘘の効用』に「教育と直観」というエッセイが収録されています（上巻 pp.286-293）。私が思い出したのは、このエッセイに書かれている博士の父親のエピソードでした。15年以上も前とはいえ一度読んだはずなのに、長らく忘れていました。しかし戦艦大和からのつながりで、久しぶりに思い出しました。新しい法学知識で生意気に理論武装をした著者が、裁判官である父親にしばしば議論を吹っ掛けやりこめるのです。それで、自分の父親を「学問がないのだ」と自分より下に見てしまうわけです。さらに「俺なんか事件を見ると全く理屈など考えずに頭の中に裁判が生まれる。あとから学説に照らし合わせて理屈をつける。お前のように理屈から入る奴はダメだ」などと言われ、ますます父親をバカにします。要するに父親は理論や知識ではなく直観で判決を書いているということです。若き法科学生には驚きですよ。ところがアメリカ留学でケースメソッドを経験すると博士は父親の言いたいことを理解します。ケースメソッドでは実際の事例だけを与えて自ら公案を考えさせるわけですが、いわゆる頭でっかちの学生にはショックだったことでしょう。これを契機に博士は教育の方へ関心を寄せます。

帰国後、素直に頭を下げる息子に父親が「知識の極致に達すると、直観と理論とが自ずから一致する。そのことを自分の経験からそう思うだけだ。お前も人の子を教える以上、直観の価値を軽視してはいけない」と言います。これを読んだのが教師になって何年目であったか忘れましたが、私はときどき思い出しています。大和のおかげで『嘘の効用』を久しぶりに手に取って、夕食後の数時間を楽しく過ごしました。

念のため、誤解してはいけませんよ。直観とはただのカンとは違います。博士のお父さんも「知識の極致に達すると」と言っておられます。何の知識も持たない直観が一番よくない。このことは将棋の羽生さんも同じことを言っています。

今週のおすすめ

・黒田龍之助 『ポケットに外国語を』（ちくま文庫）

外国語の勉強法が書いてあるのではなくて、いろんな国のいろんな言葉が好きでたまらない人のエッセイです。語学が好きすぎて、大学の先生も辞めたという、変わった人です。10代のうちにモームの『人間の絆』（*Of Human Bondage*）を原語で読んだ話も出てきますが、ストーリーよりもむしろ主人公が人生の転機を迎えるときにいくつかの外国語を学んでいるという点に興味を持っています。変わった人でしょ。さりとて読めるエッセイです。手に取ってみて下さい。

また、シュリーマンの『古代への情熱』の方が、自らの外国語習得法を明かしているとして、語学畑の人間には有名です。これもまた、読んでみて下さい。

BGM は吉田拓郎の 外は白い雪の夜 でした…。